



「古代神」

ごあいさつ

三隅治雄先生を送る

謹んで訃報のことを述べさせていただきます。

当財団理事長 三隅 治雄氏儀、さる 2 月 2 日の私暁、就寝中の安らぎの裡にご他界なさいました。享年 98。
ここに生前ご厚誼を賜りました皆様に、改めて感謝し厚く御礼を申し上げます。

なお、葬儀は故人の遺志により家族葬とし、満中陰法要のあと、さる 4 月 29 日に富士山のよく見える静岡の
霊園に家族一同をもって、ご遺骨埋葬された由にございます。合掌

この間、三隅ご門下知友、芸能関係団体の皆様から、三隅先生とのお別れの場と機会をとの声が数多あり、当
財団がその事務局となって「三隅治雄先生を送る会」を開催することができました(2 頁参照)。また、これに
先立ち沖縄・那覇市でも「偲ぶ会」が催され、音楽舞踊関係者等が実行委員会を組織し、200 人超の人が集いま
した。先生のご子息お二人は、遺骨を抱いて会場入りし、先生と親しかった沖縄の人たちとの最後のお別れの場
が実現しました。沖縄に心を傾け続けた先生の笑顔が、目に浮かびます。

沖縄・東京での会の式次第で、その最初に奏上される「送る言葉」は、両会場とも三隅先生の教え子の一人小
川直之氏でした。その東京版原稿を頂戴しましたのでご覧いただきたく、三隅先生のお人柄と学問(仕事)の一
端を知るよすがとして下されば、誠に幸いです。

小川直之様に御礼申し上げます。

三隅治雄理事長 追悼



- 1947・昭和 22 年 4 月 國學院大學文学部国文学科入学 折口信夫・西角井正慶に師事
- 1950・昭和 25 年 3 月 國學院大學文学部国文学科卒業
- 1952・昭和 27 年 10 月 東京国立文化財研究所芸能部郷土芸能研究室研究員
 - 11 月 三遠信の民俗芸能調査を始める
- 1958・昭和 33 年 7 月 初めて沖縄に渡り、民俗芸能調査を行う
- 1961・昭和 36 年 当財団創設者黛節子と最初の出会い
- 1968・昭和 43 年 4 月 東京国立文化財研究所芸能部郷土芸能研究室長
- 1976・昭和 51 年 3 月 國學院大學より文学博士号取得
 - 4 月 東京国立文化財研究所芸能部長
- 1988・昭和 63 年 4 月 実践女子大学文学部美学美術史学科教授
 - 10 月 東京国立文化財研究所名誉研究員
- 1989・平成 元年 5 月 当財団理事に就任
- 1996・平成 8 年 4 月 紫綬褒章
 - 10 月 東京都功労者表彰
- 1998・平成 10 年 3 月 実践女子大学退職
- 2011・平成 23 年 11 月 沖縄県功労者表彰
- 2020・令和 2 年 6 月 当財団理事長に就任
- 2026・令和 8 年 2 月 2 日 死去（享年 98）

在任中の主要活動歴

- 2021・令和 3 年 5 月 新宿芸術家協会公演「新宿を踊る」出演：四谷区民ホール
 - 7 月 黛アート・サロン改修工事
 - 12 月 黛民族舞踊団 12 月公演「おどり神送り」：黛アート・サロン
- 2022・令和 4 年 6 月 新宿芸術家協会公演「日本橋を踊る」出演：日本橋劇場
 - 9 月 黛民族舞踊団 9 月公演「遊びをせんとや、日本北から南」：黛アート・サロン
- 2023・令和 5 年 3 月 2023 アジア民族舞踊交流会：国立劇場小劇場
 - 6 月 新宿芸術家協会公演「道を踊る」出演：四谷区民ホール
 - 12 月 黛民族舞踊団アトリエ公演「星と風と海からきいた～日本の民踊～」：黛アート・サロン
- 2024・令和 6 年 6 月 新宿芸術家協会公演「祭りの刻」出演：四谷区民ホール
- 2025・令和 7 年 2 月 黛民族舞踊団研修成果発表会：黛アート・サロン
 - 6 月 新宿芸術家協会公演「新宿を踊る」出演：四谷区民ホール

民俗芸能研究者・元芸能学会会長 **三隅 治雄** さん

日本の民俗学には「三潮流」がある。知の柳田國男と魂の折口信夫。その折口の「日本芸能史」を継承した大家だった。国学院大学で折口に師事。「日本舞踊史の研究」をものした。

1980年代、米軍統治下にあった沖縄に足しげく通い、祭、芸能、音楽を採録した。豊妙にして美しい神事「イザイホ」や門外不出の秘祭に登場する来訪神「アカマタ・クロマタ」などの存在が知られるようになったのも、この人のおかげだろう。LP盤「沖縄音楽総攬」（16枚組）を編集、解説し、一地域ではなく、日本の芸能として広く紹介した。

学識を元に「藍の女」などの創作舞踊も手掛けた。東京国立文化財研究所（当時）芸能部長を長く務め、芸能学会の活動にも会長として熱意を注ぎ込んだ。

師慕し続ける門下生は多い。最古参で、くらしき作陽

話術・座談の名手だった。その声と語り口で、芸能の魅力はいや増して伝わってくるかのようにだった＝遺族提供

2月2日死去（老衰）・98歳

日本の芸能 敬愛深き探究

大客員教授の田中英機さん（83）は「祝賀会をしよう」といって言うことも固辞された。他の人の会になると率先して「やろう、やろう」と前のめりになるのに」と話す。

「休まない父は長男の吾一さん（86）。幼少期、「旅行」と称するフィールドワークによく連れて行かれた。「祭や芸能自体、担い手、その地域に生きる人々、彼らの生活の全てに敬意を払っていた」

2年ほど前、妻ミドリさん（93）が介護施設に入所すると、週2、3日は顔を見に行ったり、足腰を悪くしてから、長男に励ましの手紙を必ず持たせた。「父は母がいないと生きていけなかった。愛情表現も豊かでしたね」

田中さんは振り返る。「敬愛・愛敬の人でした」。断られ続けた師のための催しが、「先生を送る会」として20日に東京で開かれる。

（元朝日新聞記者・米原範彦）

三隅治雄先生を送る言葉

三隅治雄先生を送る会 令和8年(2026)4月20日13時30分 東京都千代田区 神田明神ホール

小川 直之(國學院大學名誉教授)

三隅先生には昭和48年(1973)に國學院大學で日本芸能史を教えて頂きました。私は先生の教え子の一人です。

最後にお目にかかったのは、昨年2月21日の全国税理士共栄会文化財団の「人と地域の文化賞」の授賞式でした。長野県の「新野雪祭り保存会」がこの賞を受賞し、先生にとっては特別な思いのある新野の雪祭りですから、杖をお持ちになって会場に来られました。97歳とは思えない、先生の記憶力と会話の聡明さがありました。

先生のこれまでのお仕事は語り尽くせませんが、敢えて短くいえば、民俗芸能の研究に立脚しながらも、これを所謂伝統芸能につなげながら、その両面の調査研究と、その継承、さらに芸能創作を行い、日本文化の研究と信仰に多大なる貢献をされました。

それが紫綬褒章の受章や芸術祭の芸術祭賞、奨励賞に結びついたと思います。先生の研究、活動は全国に及んでいますが、中でも深い結びつきを持たれたのが、三遠信といわれる天龍川流域地域と沖縄県だったといえます。

その具体的なことは、95歳の時に、長年会長を務められた芸能学会の「藝能」第28号(2022年3月)に「月しろの旗の行方～佐敷尚氏の誕生～折口信夫「琉球王国の出自」追考」を書かれ、96歳の時には「伊那」1148号(2024年1月)に「伊那谷の民俗芸能調査回想の記—東京国立文化財研究所発足期—」(伊那史学会)を書いて寄せておられます。これらはともに長文の論文、随想で、これを拝見したときの感動は、今も強く残っています。「月しろの行方」は折口信夫の「琉球王国の出自」に関する論述で、「伊那谷の民俗芸能調査」は、昭和27年(1952)10月に東京国立文化財研究所の所員になられて、最初の伊那谷での丹念な調査研究のことでです。

先生は、昭和2年(1927)8月6日に大阪でお生まれになり、昭和19年(1944)3月に旧制の大阪府立今宮中学校を卒業されました。現在の今宮高校で、先生の師である折口信夫は、國學院大學卒業後の明治44年(1911年)にこの学校の教員となり、第4期生と第5期生を教えましたが、三隅先生はその30年後の第35期生でした。

先生は、昭和19年4月に國學院大學に入学されますが、入学前から折口信夫のことを知っておられたようで、能や歌舞伎に関心をもって、大学生のときには芸能研究会をつくり、折口の指導をあおいだとおっしゃっていました。

國學院大學国文学科への卒業論文は「翁・三番叟の研究」で、折口からこの研究には、村のなかの翁、沖縄のウガンウドウイをする「長者のウフスウ(大王)」の研究が必要と強く指導されたとのことでした。

先生の生涯のテーマは、ここに始まり、民俗芸能と伝統芸能を結びつけて芸能を考える「三隅学」ともいえる学問と活動の原点はここであると思います。

先生は、昭和25年(1950)3月に國學院大學を卒業され、和洋女子大学附属高等学校、大阪商業大学の教員も務められますが、昭和27年(1952)に東京国立文化財研究所所員として、最初に手がけられたのは、三遠信の、大海の放下や設楽町の湯立神楽、飯田市の遠山霜祭りなどの調査研究でした。これはいうまでもなく、折口信夫の大正9年(1920)、大正15年(1926)以降の三遠信研究を受け継ぐものでした。折口が亡くなる年の昭和28年(1953)1月11日には、岩波映画に折口が書いた「雪祭りシナリオ」を新野の仲藤増蔵に届けておられます。これが先生と雪祭りとの特別な関係の始まりです。

沖縄との関係は、学生時代の昭和24年(1947)に東京で渡嘉敷守良の組踊「執心鐘入」と舞踊を観たことに始まります。沖縄芸能保存会や琉球文化守礼会との親交が始まります。沖縄に行かれるのは、昭和33年(1958)7月からで、琉球政府文化財保護委員会の招聘という形をとり、沖縄文化協会の世話を受けながらの実地調査と研究を始めておられます。この沖縄での活動も、折口の琉球・沖縄の芸能への関心と思いを、もっとも忠実に進展させたと思います。

三隅先生は、折口信夫の沖縄への思いをよくわかっておられ、昭和28年9月4日の折口の通夜では、在京の平良リエ子さんと地謡の山入端(やまのは)ツルさんを連れて折口宅を訪ねられ、折口の棺に琉球舞踊「花風」を献じられました。このことは、先生が國學院の在学中の昭和22年(1947)10月25日に、國學院大學で行われた、伊波普猷の追悼会には、柳田・折口の講演と、琉球舞踊の「花風」、「高平良万歳」が献じられたことに倣ったといえます。

今思うと、三隅先生のなかにはいつも折口信夫がいたと思います。昭和44年(1969)からの沖縄歌舞団での芸能創作、平成22年(2010)の折口の創作「執心鐘入縁起」の脚本・演出(国立劇場おきなわ)も、ここには折口がいたと思います。

先生は「伊那」に書かれた文章の中で、祭り・芸能を「見た」といえるのは、訪れた地をしっかりと歩き、人と暮らしを自己の体に刻み込む、そして得た体験と知識が「見る」ということだと、折口に諭されたと述べておられます。こうしたことを繰り返し、沖縄研究では、「おもろさうし」にある「しなて」という表現と芸能のあり様から、沖縄には「しなて」の思想があることを発見しておられます。この思想、理論には深い意味があると思っています。

また、学位論文「民俗芸能史研究」(著書『芸能史の民俗的研究』)のなかでは、民俗芸能は信仰を第一のよりどころとするが、「芸能を芸能として享受する美への情熱が、芸能の生氣ある展開を可能とする」と信仰と審美とを融合した論理を提示しておられます。

今日、ここに先生の「御魂」をお迎えして接し、改めて、先生の芸能と文化への思いを学び直し、総り多い芸能世界、学術世界をつくっていくことの誓いを申し上げて、先生に捧げさせていただきます。



本年二月二日には、長年にわたり財団と舞踊団を温かく見守り支えてくださいました三隅治雄理事長が、九十八歳にて永眠されました。理事長より賜りました数々の励ましとご厚情に、あらためて深い感謝を捧げます。私どもは、その志を胸に、舞踊の灯を絶やすことなく次代へ受け継いでまいります。

アトリエ公演は、私どもが日々の稽古の中で積み重ねてまいりました成果を、間近で感じていただける場として開催しております。民族舞踊は、土地の風土や人々の祈り、喜びや哀しみを映す鏡でございます。その息づかいを大切にしながら、現代に生きる私たちの感性を重ね表現いたします。小さなアトリエから生まれる一步一步が、未来へとつながる歩みとなりますよう、心を込めて舞わせていただきます。

日頃より温かいご支援をいただいております皆様に、心より御礼申し上げます。

黛民族舞踊団代表 黛 琉美

《プログラム》

一、祝い唄（沖縄） 沖縄の祝い唄のリズムを踊る。豊年を喜ぶ祝いごとの祝典序曲。



二、ソーラン節（北海道） 鯨(にしん)の漁場に湧きあがる大漁の唄声。その喜びがほとばしる、勇躍歓喜の明るい表情が照り輝く。沖揚げ音頭の創作バリエーション。



三、小原木（新潟） 今から約400年前、戦国の動乱を経て、近世江戸の初期、出雲の阿国によって踊られた念仏踊、かぶき踊りの面影を残す、越後「綾子舞」名品の一曲。



写真：田中文太郎

四、黒田節（福岡） 雅楽「越天楽」の流れをくむ築前今様ともいわれるこの曲は、民謡の中でもとりわけ格調をもった優品で、若き武士の清楚にして活達な面影を所作に仕組んだ絶品。



五、鳩間仲森（沖縄） 八重山・鳩間島のまんなか、中岡（森）に登って見える豊かな自然の景観と、純朴な島人の織りなす風土を踊りの優美に託した名品。四つ竹の響く音が涼しい。



六、鳩間節（沖縄） 鳩間中岡（はとまなかむい）を原曲とし近代に作曲された。琉球空手の直截的な線の美しさを盛り込んだ、南国色の濃い創作。



七、古代神（岐阜） 岐阜県白川郷に伝わる豊年祝いの踊り。越後発祥「広大寺踊」を「こだいじん」と呼んで宛字した。流祖黛節子はこの曲にリズムとテンポを与え、軽快にしてエネルギッシュな小群舞の作品に結晶させた。



八、山中節（石川） 北陸・石川県の山中温泉地方の座敷酒盛り唄の一つ。日本的な美しいメロディーにのせて、山あいの霧が滂いては消えていくかのように、旅の人との別れを惜しむ哀愁が溢れる。



写真：田中 文太郎

九、おてもやん（熊本） 九州熊本の陽気で快活なメロディーにのせて、鄙びた中にユーモラスな味わいと明るいコミックな娘の愛嬌。



十、相馬盆唄（福島） 盆踊り唄の一種で、相馬盆踊唄とも呼ばれる。元は秋田甚句の系統で、山形県の庄内・村山地方を経て福島県仲通り・浜通りに伝わると言われる、盆踊りの唄に併せ賑やかに踊る。



写真：田中文太郎

参加公演 新宿芸術家協会公演（令和7年6月22日・会場 四谷区民ホール）

新宿芸術家協会が主催する多ジャンル舞踊公演。黛民族舞踊団は2017年よりご縁のもと毎年参加しています。第一部は自由な発想による作品集（ダンス・リベルテ）、第二部はテーマによる創作作品集で構成されています。今回のテーマは「新宿を踊る」黛民族舞踊団は第一部に出演し、「祝い唄」・「ソーラン節」を披露しました。

「祝い唄」琉球のめでたい節を素にした祝儀舞の格調。



「ソーラン節」ニシン漁場の娘達の躍る身体、歓喜の声。



写真：池上直哉

令和8年度 黛民族舞踊団公演情報(令和8年4月現在)

【自主公演】

財団40周年記念事業

民族舞踊文化フォーラム

会場：黛アート・サロン

詳細：準備調整中



12月

黛民族舞踊団アトリエ公演 2026

会場：黛アート・サロン

詳細：準備調整中



【参加公演】

4月25日(土)

NPO法人東京国際交流協会主催

東京国際交流フェスティバル

華の春 2026

会場：池袋西口野外劇場・入場無料



6月19日(金) 新宿芸術家協会主催公演

The Dance Gathering Vol.29 「BEATLES を踊る」

黛演目：第1部 津軽じょんがら節 チケット：自由席 前売 4,500円

会場：四谷区民ホール 当日 5,000円

時間：開演 18:45(開場 18:15) お求めは財団事務局までご連絡下さい。



舞踊団員募集のお知らせ

日本の伝統舞踊を学び、舞台上で踊ることに興味がある方は、ぜひ稽古見学や体験レッスンに参加してみてください。黛民族舞踊団では、現地の民俗芸能を基に舞台芸術化した作品を継承し、創造しています。団員は現在15名で活動しており、新しい仲間を募集しています。舞踊団員として活動することで、日本の伝統芸能を学び、技を磨くことができます。また、舞台でのパフォーマンスを通じて、自分の表現力を高めることができます。

詳細は、財団事務局にお問い合わせください。一緒に民族舞踊を学び、黛民族舞踊団の舞台上で踊りましょう！

稽古場：黛アート・サロン(地下鉄 赤坂見附駅 徒歩2分)

稽古日時：毎週月・火・木曜日 18:00 から 21:00

問合せ先：黛民族舞踊文化財団事務局

TEL 03-3583-3633 / FAX 03-3583-3639

E-mail info@mayuzumi.or.jp

home page





令和8年2月アトリエ公演集合写真

一般財団法人 民族舞踊文化財団のあらまし

当財団は、わが国伝統の民俗舞踊を舞台芸術として確立し、その普及向上を図るとともに国際文化交流を行うことを目的として、昭和61年3月文部大臣から設立を許可された団体です。財団設立後は、(1)民族舞踊普及向上のための中央における公演をはじめ、地方巡回公演を活発に行ってひろく一般にこれを紹介し、また研究成果の発表会等を開催し、(2)後継者の育成を目的として民族舞踊の研究者(音楽、振付けを含む)、舞踊家のための研究会、研修会等を開催して創作活動を奨励すると共に技能の向上を図り、(3)日本各地および東南アジア諸国の民俗芸能を取材し、その研究を行うと同時に収集した資料を整理保存して一般にこれを提供し(将来は資料館を設置して一般の利用に供することを計画しています)また、(4)世界各国にはそれぞれ民族舞踊団が国家の庇護のもとに活動していますが、これらの舞踊団との交流や、東南アジア諸国の民俗芸能伝承者たちとの交流等、幅広い国際交流を推進して相互の連携と研鑽につとめ、(5)民族舞踊、民俗芸能に関する資料および研究成果等の出版物を刊行して、民族舞踊に対する理解を深める目的達成のため、年次を追って事業を充実していきたいと考えております。しかしながら、事業を発展充実させていくためには、何と申しましても経済的基盤を確立する必要があることを痛感いたしております。当財団が、真にわが国を代表する民族舞踊の振興団体として育ってまいりますよう、財団の事業目的を御理解くださり、各界の方々の御支援を心からお願い申し上げる次第です。つきましては、当財団には下記の通り賛助会員規程を設けておりますので、皆様にはぜひ賛助会員として、会費により御支援を賜りたく、お願い申し上げます。

民族舞踊文化財団 賛助会員規程

一、賛助会員とは、この法人の趣旨目的に賛同して入会くださった個人・法人(団体)の方々の名称です。

二、会費寄付の内容は下記の通りです(但し、年間会費として扱わせていただきます。)

ア、個人の場合 個人会員……………五千元以上

特別個人会員……………十万元以上

イ、法人の場合 法人(団体)会員……………十万元以上

特別法人(団体)会員……………百万元以上

三、賛助会員の特典

ア、特別会員(個人・法人)

① 年一回以上公演全ての切符御一名様御招待

② 「財団の宴」など種々の行事に御招待

イ、会員(個人・法人)

① 年一回以上公演全の切符御一名様御招待

なお、御入会くださいます方は、賛助会員会費寄付申込書に御記入の上、御返送いただきたく存じます。賛助会員会費寄付申込書は、当財団宛に御請求ください。領収書は、銀行にお振り込みいただいた後、お送り申し上げます。

民族舞踊文化 No.38 令和8年(2026)5月27日発行

発行人 田中英機 編集 民族舞踊文化財団事務局

THE MAYUZUMI FOUNDATION FOR TRADITIONAL FOLK DANCE

一般財団法人 民族舞踊文化財団

MAYUZUMI BLDG., 3-10-3, AKASAKA, MINATOKU, TOKYO, JAPAN

〒107-0052 東京都港区赤坂 3-10-3 黛ビル4F

TEL 03-3583-3633

E-mail info@mayuzumi.or.jp

FAX 03-3583-3639

URL http://www.mayuzumi.or.jp